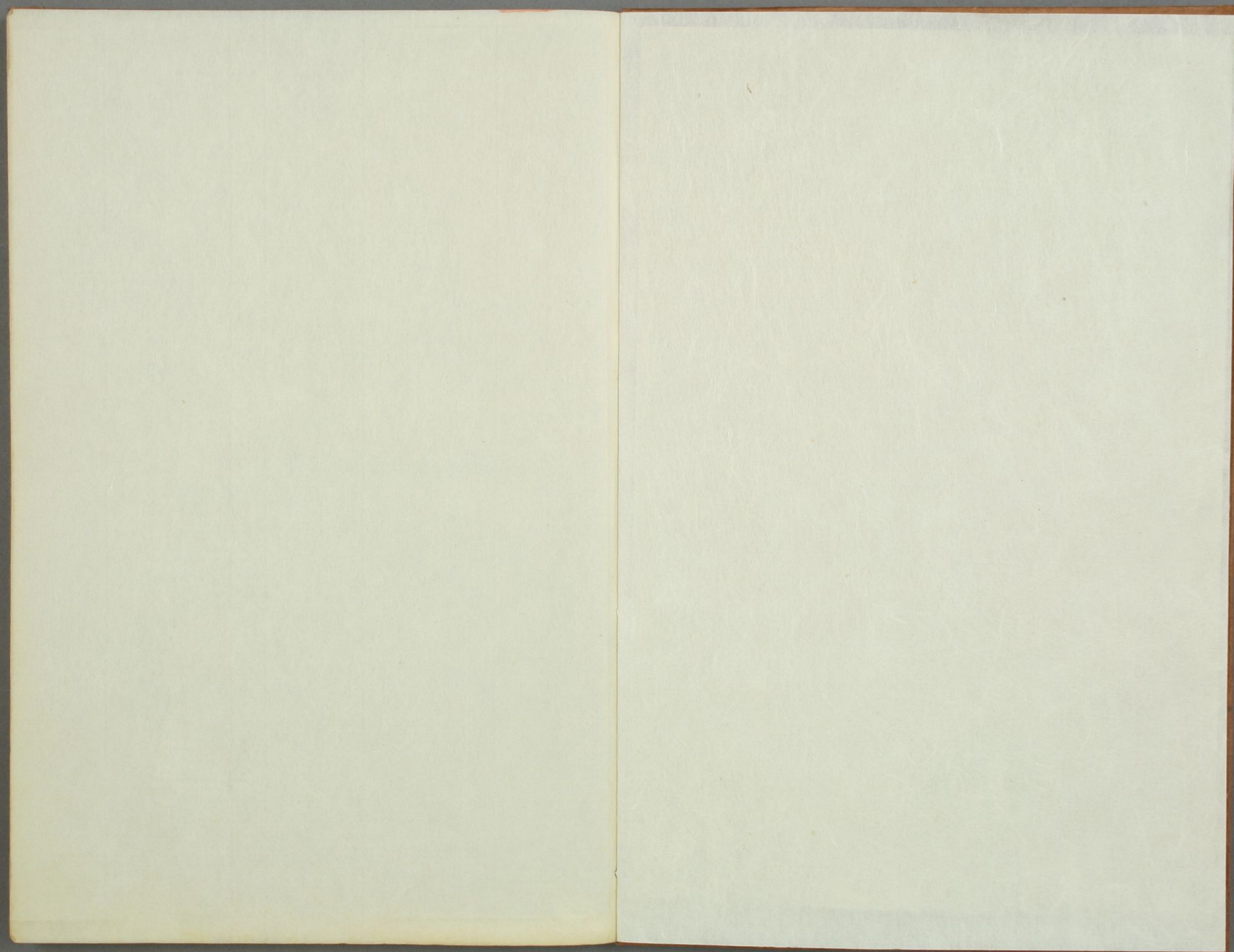


雲  
孔  
溥  
之

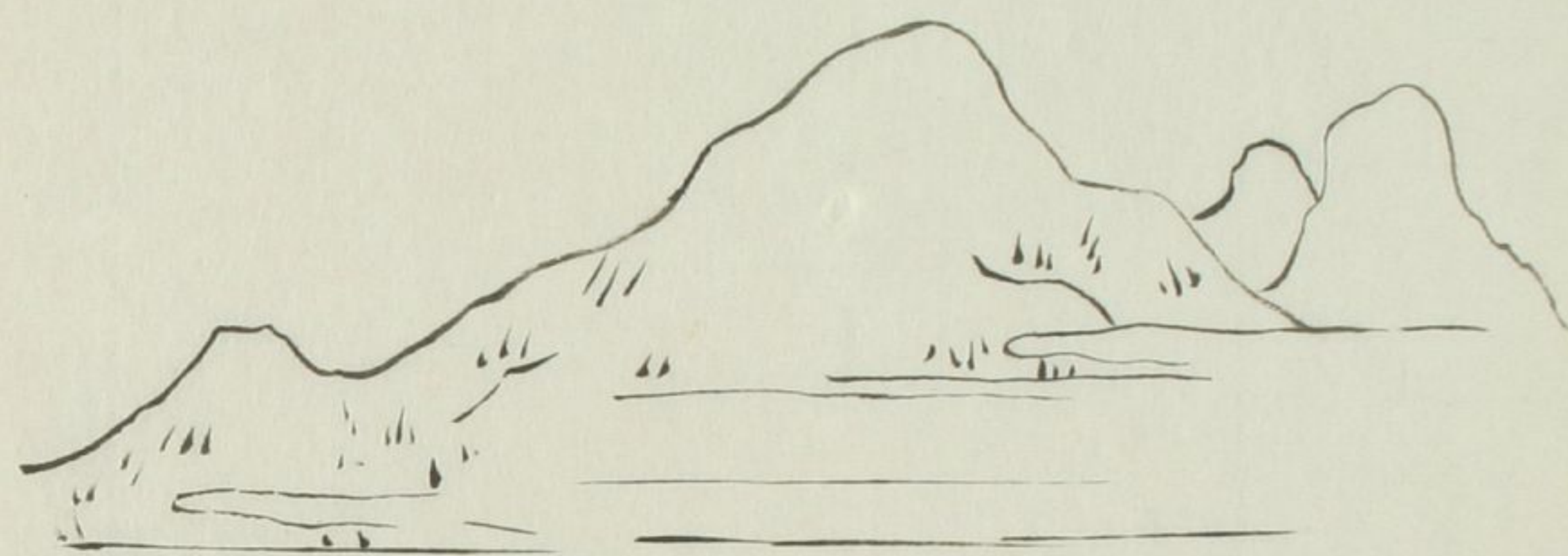
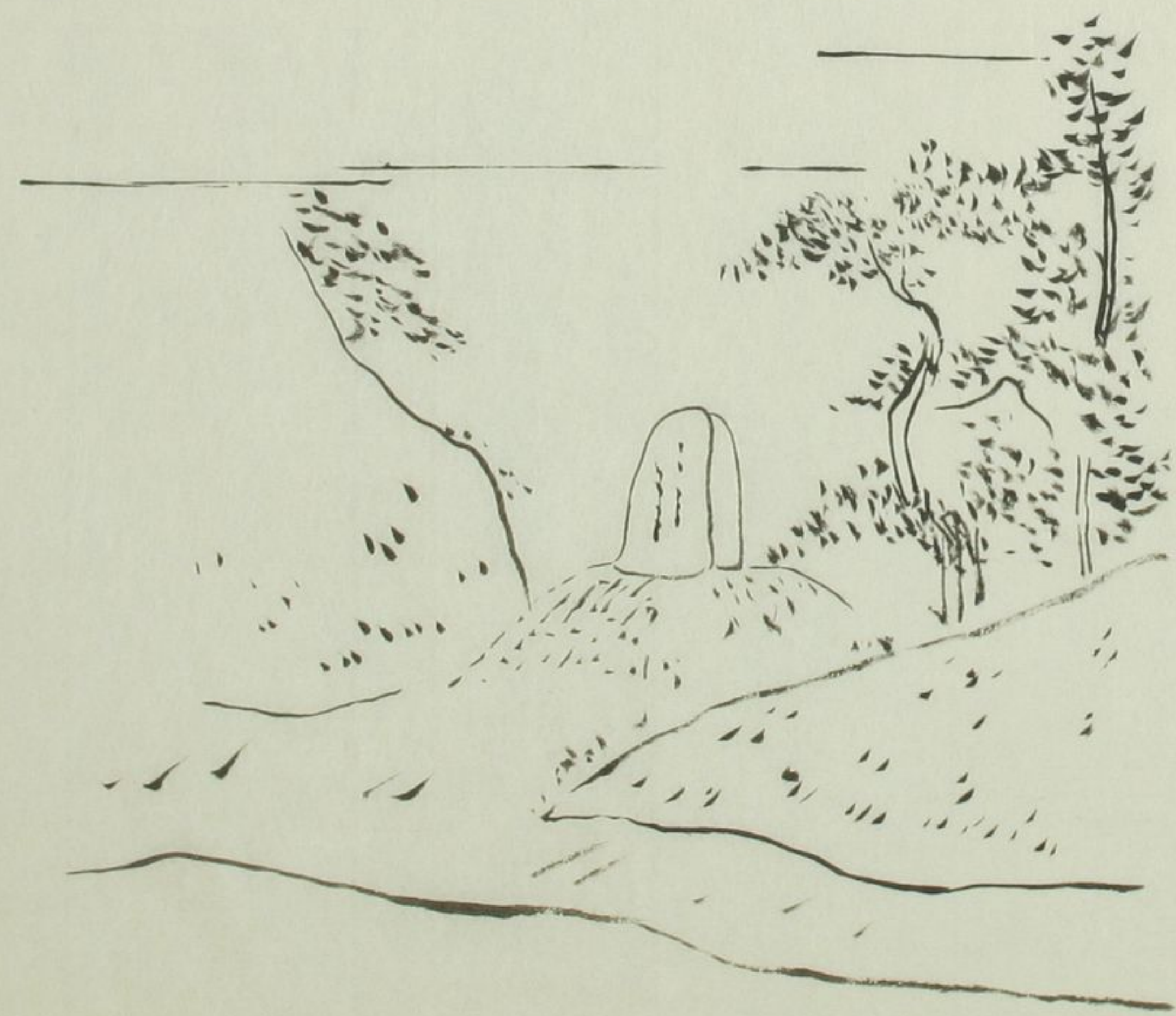
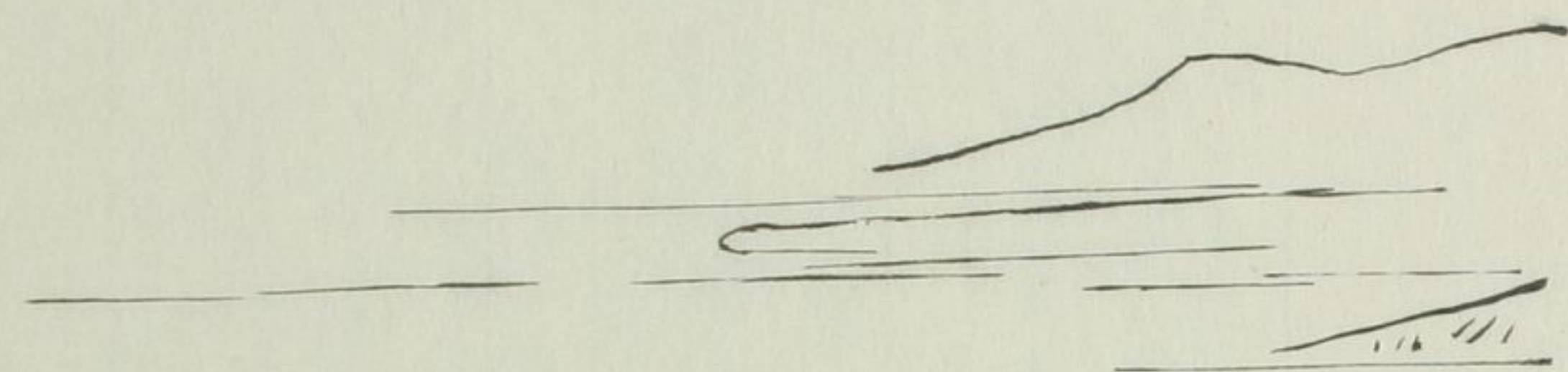
中村俊定文庫  
文庫 18  
537  
1











耳谷画



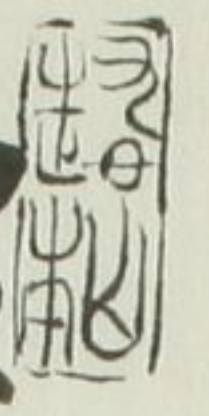


とせ

音ちるや種屋の

薄れ刈

序



と地りくらに性ひく者そ目と  
のによりのそちおや一夢植のま  
植るも鎌り鎌るの成るやまん  
甚やそ原にこるまはと甚其のそ  
御治の御治るもそととととと  
治る一と治るもとととととと  
昔はそとととととととととと  
とととととととととととととと



うあそく中ふ若居坂ハ眠・那のぬー  
ういとふむぐーなりたゆもてふよとに  
けしあち車の轆小車の軌きくらりらと  
とふあゆふく丸箱かこしとふくく  
その風はゆるの佳又あふー  
かへ舞くくんく感ととあに  
ぬーはかき美因縁ああ  
期はあひてむととおそあてき  
みりやくくああああ刻く

うりこくふあはらのふとくまは  
破知地く、のとも務の気はあうむの  
溜きーまーありの候ー  
佳をたぐーとそ是、かのくり  
板ふのくり築ふとーおはあくと山  
ふーちかつあて切びなとあと一  
忽あぬくおのーああのう  
くく四本子あまー碑ああ  
是江上木ーく花うらのまあ



いふまじき世のくまをよとよ  
かきとくをいふはくはくはくは  
糸口と世ふまあや直しよ  
なり方ふめて急はそこふし  
く唯はくらくれおそれ耳ちひ  
く後に三つく懐報のおひと  
ふかく積ゆりふあふ山は  
きらま長あまといえのま  
はくまをいふくはくはくはく

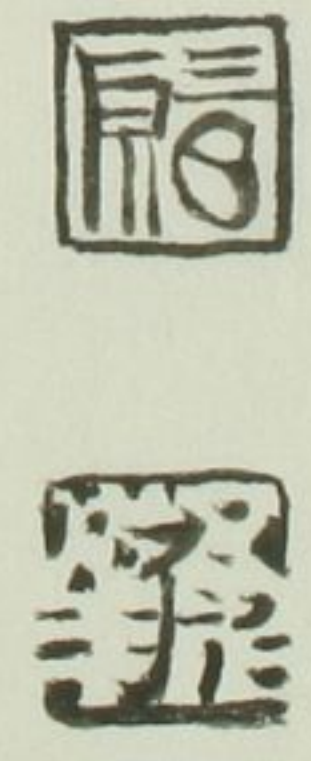
くはくとふまかこくま  
中三郎と敵くおまはくはく  
く深層のふくはくはくはく  
みやまはくはくはくはくはく  
捨りくまと清平く方海く  
まを補くはくはくはくはく  
くまのまはくはくはくはく  
くまはくはくはくはくはく  
のまはくはくはくはくはく



三人をくくんとくまきしん  
 一六新巻り中 芝道次下におゐて  
 吾は孫ふとのふり

常治

五峰



凡例

一 哥仙 并雪丸文深川八貧ハ同國諏方郡龍湖カ  
 固ノ古人周徳ト云者元文丁己ノコロ雪丸集ト号  
 シテ書ヲクト云凡予モ曾良ノ直筆ト云書ヲ所  
 持スル故ニ臨書シテアラワス去凡首尾ハ紙ヤツレ臨  
 書シカク年故摸寫ス  
 一 外ニ祖翁ノ哥仙并古人ノ発句ハ予年來諸方ニ  
 木蛇ヲ引シ先ニテ寫本ニテ取持スルヲ写アルハ  
 祖翁ノ真跡ヲ見又ハキレクニ成シ古集ニ有ラ  
 写シ置シカ埋モレントヲ懼人ロラモカヘリ見ス是  
 叙ス諸生笑トナカレ  
 一 上巻ノ名禄ハ聞及シ古人ノ発句又ハ予知古人  
 勺ヲ出ス下巻ノ名禄ハ勺ノ至來ノ遅速ヲカセ  
 席ヲ不論出ス諸君子位ヲイフカルトナカレ





雪衣履集卷之一

芭蕉翁行脚之控



一宿舎はともや久しあつて其宿を去りて松樹下石上  
 に坐してあつたを家邊をたぬかへ——  
 一腰は寸鉄ありとも帯はへりて熱くても此  
 命を重んずるは君父の仇ある所不に門外ある  
 控へてはいつて死物なれば思ひする情阿まひあり  
 一衣類は財お恵にまじりて——とてさうたよかしく思はる  
 ことを以て極阿まひ——



一 莫多獸の肉を好む喰へるは其食味味しあけり  
人他事に好む女さなり菜根を咬て百を致  
たは(元)酒を思ふへ

一人乃未だ死し己の句を書けり(元)酒を思ふへ  
志し

一 たと(元)嶮岨の境多うも亦方乃(元)酒を思ふへ  
たう(元)中途より(元)瑞ふへ

一 也た(元)なる(元)能く(元)事(元)た(元)れ(元)一(元)投(元)と(元)己(元)瘦(元)脚  
し(元)た(元)も(元)へ

一 好んで酒を喜ぶ(元)酒を思ふへ(元)酒を思ふへ(元)酒を思ふへ  
ハ(元)微(元)醺(元)と(元)して(元)歩(元)へ(元)一(元)札(元)と(元)及(元)も(元)其(元)の(元)い(元)す(元)め(元)あり  
糸(元)に(元)と(元)落(元)み(元)を(元)用(元)る(元)も(元)破(元)る(元)と(元)憎(元)て(元)た(元)る(元)酒(元)を  
を(元)さ(元)り(元)別(元)州(元)あり(元)情(元)や

一 船(元)跡(元)兼(元)代(元)と(元)忘(元)ふ(元)へ

一 桃(元)諧(元)乃(元)外(元)雜(元)作(元)と(元)し(元)に(元)雜(元)作(元)出(元)た(元)は(元)其(元)後(元)我  
し(元)と(元)号(元)と(元)巻(元)ひ(元)へ

一 此(元)の(元)短(元)と(元)阿(元)け(元)己(元)長(元)と(元)解(元)する(元)ふ(元)人(元)を(元)待  
て(元)己(元)不(元)と(元)保(元)は(元)志(元)し(元)中(元)に(元)死(元)なり



一女性乃 桃友ふきこむく 師ふも女子ふせ  
いぬ事ありけりく 親灸せけ人子以て傳ふ  
へし 想しそ男女乃 道に詞をよみたり 流瀟  
そし心 熟しき 此乃こゝに 道ふし 成就ん  
己を省く

一 主阿るもの 一針一草ありとも 丸くは山川  
江阿るも主阿り 勒よや山川 旧跡あり  
若く阿り たく付る事 あり

一 孝乃 師思ありとも 忘るる あり 一 白理  
とこ 解せ 人の 師と なる事 あり 人ふ  
也 此 こと あり 後乃 あり なる

一 宿一 飯此 をも おぼえ 思ふ あり なる こと 又  
媚 偏 あり 事 あり 此 乃 人 世の 奴 あり けり 人の  
けり 人 といふ あり  
一 夕ア とも 思ふ 思ふ あり 一 思ふ あり けり 師 といふ  
事 好 あり あり あり 人 乃 方 あり なる あり あり  
思ふ あり あり あり あり あり あり あり あり あり  
お 兼 食 あり あり あり あり あり あり あり あり あり



存く條に我門の修飾をの修者や

桃青

當時を見侍るに少少の控をもちり御する  
 逃客は十ふもなりし不おるふ人となり  
 利慾のあめく媚論の偽を以て世を渡り  
 いかまじり事あり阿の古人の名を賣  
 自己に勝る能やうにいちくまの儀く  
 羊皮をかくて狗肉と賣の流して切賣此功并と

ふー

雪のゆくは文

昔良何某に此阿らうちく飯く指を志め  
 物ち夕あくとつ川とる系食物と信む時ハ業  
 を折くぬたまげとすう茶を煮る板に木りて  
 新成きく性隠深とに此おくおく更金を  
 半の阿の板をともし

きみら成きし

とせ成

よにねんせむをゆらけ



深川乃八首たづら

題雪

米賞

米買と雪に袋やまげ頭中

芭蕉

薪賞

雪のぬいそうに依野の薪買人

依水

酒賞

さげやよふをみたこー門のあ

苔翠

炭賞

炭を中音ふかき山折友

泥芥

茶賞

雪ふかきやーことせよちやん袋

夕菊

豆腐賞

豆腐と照る友月

友五

飯焚

嵐雪

下野玉高久角たづら宅少く

みらぬく一見の素門用行二人形頂の竹條  
原と尋て松教生石見人と急侍の程と















黒木少と屋部たふけ乃山  
多うよめとまをやまをんあひ  
阿く時ゆりよあみこけけ  
お母のそれ書してあくる夜の月  
こ川乃いともやふ佛はくうて  
麦<sup>あ</sup>も<sup>ま</sup>た<sup>は</sup>詠<sup>の</sup>い<sup>て</sup>湯<sup>た</sup>あ<sup>ら</sup>う  
たひ麻<sup>あ</sup>侘<sup>ま</sup>多<sup>は</sup>肉<sup>の</sup>圓<sup>乃</sup>う<sup>ら</sup>ま<sup>の</sup>  
何<sup>れ</sup>持<sup>て</sup>小<sup>人</sup>の<sup>志</sup><sup>あ</sup>う<sup>さ</sup>と<sup>を</sup>ま<sup>を</sup>さ<sup>げ</sup>て  
猪<sup>と</sup>も<sup>も</sup>れ<sup>ハ</sup>朝<sup>の</sup>も<sup>も</sup>や<sup>き</sup>

山 鯉  
芭蕉  
嵐 蘭  
曾 良  
嗒 山  
芭 蕉  
嵐 竹  
嵐 竹  
嗒 山  
嵐 蘭  
曾 良

一門乃む見衣れさぬく  
は〜たる殿乃筋のよき

山 鯉  
嵐 竹

歌仙

秋らうたの後のあや田舎半  
志と後よりおけお格子れ露  
月残る夜あう乃大陰お消く  
起深しと深〜下深志〜響  
階ま〜深丸雪みそしの一志きり

芭蕉  
木 節  
惟 然  
支 考  
芭 蕉



子乃刻ふいて物細くする  
夕食をくりて隣に膳を待  
何れ箱とも志ぬれんか  
宿くして啼しれ聲の喧嘩沙汰  
佛檀の障子に月おきか  
標のくらの落る阿きうせ  
ハ朝に礼におこし仕返り  
舟前乃鱧の時ふさう

蕉 芭 考 然 芭 蕉 然 考 蕉

和氣濃き地昇に夕の出る  
持寄るを深醫者に草履  
結掛て廻繩たぬ花乃垣  
足袋脱ぎ千量乃陽光  
年既にちいさ記やつ伏させ  
隠れたるを立なす  
乃炒れえを白記願はき  
夏より琵琶をと川つと並  
半部はに面し雨をみるやうに

考 蕉 然 芭 蕉 考 然 芭 蕉



竹の根を折りて此はく  
 志とくとき京への枇杷を寄ひつき  
 娘と娘しりし悪口とく  
 客ハ皆さむくしき心火燧此言  
 正しきそれ多原もよさるなり  
 髪短ふてきくおふ日此新月夜  
 木二十たうり村をたむむ  
 満化の中稲仕何けて喰う系  
 桶もたうるも何しき此論

然 蕉 考 蒨 蕉 考 蒨 然

投お残をよきし猫の迎阿き  
 首りしを此をかか掃除日  
 形咳く系を稿初る裏乃し  
 津くち此肥心赤土の岸

蒨 蕉 考 蒨

出羽乃新庄ありし  
 明るけりしを宿せし破水蚊帳  
 をしめしつは原風此蕙物  
 兼作原歌く詩残折 流く

風流  
 芭蕉  
 孤松



旁立の尻巾乃をもとを染  
その後た原月二夕里隔り  
馬市くして約む久せん  
まけく原祖父弓矢此と傳  
りもその後そ判と定成  
安りきん神酒ちやきん唐靴子  
簾を揚てとをんつとく  
三夜甘んる後く古は此おしれし  
浪は音ゆめ鳴乃羞もく

曾良  
柁風  
筆  
蕉  
流  
良  
如柳  
木端  
風

霞ゆぬ松ハと女まことおとけり  
秋踏志けふ措乃つま  
やきくし月を燈の小社西へ  
神洗りんとう落<sup>持</sup>おとくなり  
散花此今ハ衣をきせも海く  
陽光消保庭前此石  
樂しみと茶をひくせり其の水  
果は花恋しり老兒さふれ  
社香炉煙ハ系り立流く

柳  
蕉  
松  
端  
蕉  
良  
流  
端  
風



何んかの常風不ののち  
 老僧れいて小藁をく  
 武士くく水入東西の門  
 自をくく麻を鳴る奥此京  
 羽織く包む草猪れ月  
 秋文て換子かきん菅乃笠  
 くくくくくくくくくくく  
 葉緑凡牛と尋るかまくれ  
 ち坪の裾みんかるか火

柳 蕉 良 端 流 柳 蕉 風 端

ちまふ休滞の者も跡も  
 よこれて多紀祢宜れ白張  
 何くくくく石のかげも  
 志くく山を雨のつき  
 咲く花をたみ袖ききて  
 雪かくく胡蝶舞 宿

此巻ハ風流亭めえ孤松とよまの  
 名なるより出羽玉湯沢とよま  
 阿字一ッ字一巻一カ阿字一ッ

蕉 流 風 柳 端 良



世よ晋子の初懐紙とてあり霧の  
歩行乃百韻といふ又十韻ハ袒の翁  
便阿毛しをかかえ此宗更むせしむの  
故事にあり末又十韻といふ

此玉の式仙を名ある縁のかせ  
京より汲す原磯井此より  
玉川やおのく六の所みえ  
江湖くよ年よりにりり  
卯此も此管精もよあるか那  
茅里 仙化 芭蕉 コ舟 平角

亦うこのせえさきりくよ原  
南むく葛屋の畑乃まききへて  
親と其名をう川 畫（豆カ）のつまく  
餅作らなれ此廣葉を打合せ  
執貝より賞すし此れら路を  
席の音を物いしぬ人もやうしめ  
よこよも男此新まむ月  
此れ而袂七里をぬしと淡  
伊弉河内乃きの川つら  
揚水 不ト 朱結 芭蕉 松風 文麟 不ト 揚水 李下



まろ車茶つゝ芳もあ〜い  
と角

生あハさりりの院とを閉  
千春

二月は蓬菜人もすさめはや  
コ舟

婦待牛はおそき見は新  
芳里

胸のぬ越乃綿をおりくそ  
芭蕉

おまひあ〜りは菅は川は  
松風

菱の葉を志く〜いあせてた〜時  
文麟

木臭きこも深山陰の〜も  
孝下

囚をやくそ体む原乾は月  
コ舟

萩さ〜おはも〜つはあい  
不卜

問〜時流と先より秋は〜  
千春

心な〜ん世ハ蟬は〜  
朱弦

之度婦む〜〜極芳野山  
仙化

阿〜ハ春々草の露は〜  
孝下

傾城を志はぬきの〜  
文麟

源よみ〜おは〜  
芳里

井深き箏折は〜  
琴白

梅ま〜若<sup>(き)</sup>我白ひなり〜  
コ舟



むく而く石火灯ふき清ぬ  
蛇さる<sup>3</sup>夜<sup>3</sup>の沖も静よ  
伊勢を渡る月も船日のまがら  
榊よと文々橋造る秋  
信長の法きける代や中野ん  
居士とよと角くかゝる  
みり牡丹十里れ香をふて  
雪よと心む谷くおる湯をきく  
岩根みくをれ地をそへひよる

峡山  
仙化  
不卜  
孝下  
文麟  
千春  
峡山  
其角  
コ舟

笑つや之井の法師と  
名ぬ恋より仙人の延命して  
策弦をさあれ宵の泣く  
是引乃庐山泊るまひさよ  
千春とよと角くかゝる  
みり川涼に打てるの川清ひ  
雪かこにまゝる雪の白ゆき  
床蓮乃七<sup>(B)</sup>府く整る花白く  
連く風くくふ張ふ久き

仙化  
芳里  
揚水  
其角  
松風  
峡山  
不卜  
琴白



貞享三丙寅年正月

亡師麦浪舎小抱一以正凡の意と云ふ事

字一並一々多阿くは

- 一 羽曰格了入て格をおさる時比せまく格入る時比
- 一 格路ふる一格又格残出て初て自在は
- 一 詩奇文章を味て心を向上の一路に抱ひ作残
- 一 四海に及くは

一 子歳不易一時流行

一 他門の句ハ彩色れと一 他門の句ハ墨線のこと  
 くおさる一 抱ふ事此ハ彩色は紙中もあらん  
 心他門はかよりりむ志ありを中一と云

一 名人占地をよく調しうと一 抱ふ事此ハ危き亦  
 又妙をよ上よハ法よき下おもしうとあり

一 等類作例才一吟味と云

一 古書撰集了眼をばと云

一 家門の風流をよまふハ先鶴の安行此百韻



冬これ日暮れ日飄集嵐依搖葉何野を驚  
喚き入——蒼白の時代くさるり——

一初心のうらひの数々好——そんすうな情とこい  
ち大山を越し向乃お藤へ下りある正と葉を——  
高人を越んとるのさるもれいもわいせ人を愛——  
はれしと心う記すれ物落ふやましくもくもく  
時い古今の胸中と知る事ありこい

一徘徊の中より下のもめとあやまらる俗流平  
作とれとえ入きるあ——きう俗流平作とたきん

だめをうついな記事さうさういふ徘徊とえゆる  
い流き——記さう徘徊の方葉のきさうさういハ  
上天子よりト土民ま——も味お道なり唐明  
よとて中いみの高家傑にも恥するま——唯心の  
い——い——と——

一ふ尔於舞を愛さうそよまハふ尔於舞ふれ才  
のあわれいん指の能を味ひ——まも兼末を事なれ  
一白の姿いまき柳のいあみたれさうこくいしと推く  
微風よあやなほもあ——かほ情い心裏の花



ともしたつと如北月と親まてし附ふ花月  
秋と梅乃馨へ思つてとありきし

末略片

名録

白乃葉片常盤此名や青の叶  
七草や翠乃瓜ふもふき蒼荷  
追分と藤と人待和のんこ  
をよのいさひもなれと山たれ

柳居

古山

見帆

ふ代尾

花い面りしとと志とん鳴蛙  
夕風と結巻と音や 反木立  
下深乃まきて散る多銀杏哉

如之

来波

百川

○

花のかけ刀此はすゝ知水尾  
初雪やせと散るも此だて後  
雪のほろち記書や初と水  
小糸女乃伐跡しとやむめ此哉  
新顔の甚ますて枯く星さし

イセ 菟士

栗津 雲裡

イセ 梅絡

越中 宣中

カ、 菊園



分おのよそで場色あまふく極成 尾州 八巻

維子乃そり宇津此山名こ柏子阿り 信松本 之盛

あかくきちのあかかひてはきん 香熟良

蓮翹や常 シナノ 鶏山

桜咲く何由乃人々知る福も 上州 知山

此奥もちるり桜のなみ道り 日 松谷

新居乃阿りまハニの新きくき イセ 浮石

○

冬月や何くきるあれ 東都 冬碎

飼猿此山アて啼や 日古 秋化

明日ハ掃く落葉此人の日記 下理鳥山 斜斗

月の夜も登着て廻る 水戸又カク 素岩

あ月もや降り 日大田 止尹

立姿あ尼せて 日林松 市申

燈火をアんよ 信川下 尺活宗

提灯や時向く 日午塚 鳳五

増積松門の悠や 日上田 久孝

百生のあつ 日大田 芳水







